

## 「やらなきゃ良かったあのテーマ ～臨床的事業開発論～」

池沢 直樹 著，オプトロニクス社

旭硝子株式会社

笹井 淳

**Jun Sasai**

*Asahi Glass Co., Ltd.*

最初に断っておくと、通常こういう書籍の紹介ではあまり主観的な意見は入らないものなのかもしれないが、あくまでも筆者個人の意見と感想による紹介であることをご理解いただきたい。

さて、NGF からの依頼で、初めてこの本のタイトルを見たとき、正直なところ「しまった！」と思わず感じてしまった。というのも、依頼文章中には英語のタイトルが必要、と書かれているからである。筆者の拙い英語力では、この本のタイトルに含まれる微妙なニュアンスを含んだ英語のタイトルに翻訳するのは困難であり、紹介文を書く前段階でしばらく悩まざるを得なかった…。という訳で、英語のタイトルが、もしおかしなものであったとしてもその点ではご理解いただきたい。ただ、このことはそれだけインパクトのある書籍のタイトルであるということの裏返しとも言えよう。

そして、このようにインパクトのあるタイトルから最初に想像したこの書籍の内容は、プロジェクト X の失敗版のようなエピソードが書かれているようなものである。しかしながら、実際に本を開いてみると全く異なり、一言で言

うと「上司に後ろから声をかけられているような感じを覚える本」であった。

では、なぜそのように感じる本なのか？、という説明の前に、筆者自身の今の会社での立場というものを説明しておきたい。(書籍の代わりに自身の紹介をしているじゃないか！という指摘は、この際ご容赦いただきたい。) 大学でガラス材料を専攻して合計 6 年間の研究室生活を送ってから現在の会社に入社し、今は中央研究所で研究開発に従事してほぼ 6 年が経過していて、それなりに仕事上でも重要な役割を任されてきている、という一般的な若手研究員の姿である(と自分では思っている)。こういう立場では、現在のテーマの遂行や新しいテーマの創出という点で日常的に周囲の人間との議論や上司からの叱責などを受けているわけであるが、たまに自分の後ろを通り過ぎる上司に「もっとがんばれ…」といった意味の声をボソッとかけられることがある。説明が長くなってしまったが、要するにそういう状況を彷彿とさせるような内容の本であるということである。それは、研究所(もしくは研究開発部門)およびそこに属する人間の役割とそこで行われている研究開発テーマの遂行状況の問題点が如実にこの本に描かれているからであり、加えてこの本の中の大きな一貫したテーマというのが、著者からの研究開発担当者への苦言、アドバイスであるということにあると思われる。もっと端的

な表現をすると、この本で焦点を当てられている当事者である我々にしてみると、指摘があまりに的を得ているので、著者がわれわれの会社の実情を見て、それを基にしてこの本を書いたのではないかと、とついつい思ってしまうのである。

実際に上司からこんな事を言われたらショックだろうな、という想像が容易なフレーズも数多くちりばめられていて、もっとも過激なものひとつは「やらなきゃ良かったあのテーマ、つぶせばよかった研究所」であろう。これなどは、自分がテーマ責任者や研究所の責任者でこんなことを言われたら、どれほどショックだろう、と少し笑ってしまうぐらいのフレーズである。話があらぬ方向にそれてばかりであるが、「そんな目にあわないためにはどうすべきか？」をテーマに、著者および今まで著者が仕事上の付き合いをしてきた人々から得た経験論からこの本は成り立っている。だから、サブタイトルが“臨床的事業開発論”なのだと言者は述べている。

書籍の内容に関しての詳細はやはり実際に目を通していただくのが一番であるので、具体的なところには触れないようにしておくが、この本においての一つの特徴は、“名言・格言（らしきもの）”が非常に多いということである。それらが各章、各節の表題にもなっており、目次を眺めているだけでも非常に役に立つのではないかと思わずにいられない。一方で、それら言葉はすべて（嫌味な）上司からの発言で、反語的な意味でチクチクと響いてくるという気がしてならない。というわけで、印象に残る言葉を以下にあげさせていただく。ちなみに括弧内は私の後ろから聞こえてきた（気がする）言葉である。

・「人・物・金」三拍子揃いと成長しない  
（三拍子そろっていないことをうまくいかにせいにしないか？）

・研究所の使命は既存事業の問題と不安の解消  
／研究所は夢を作る工場ではない  
（夢を見るのもいいが、その技術は本当に使えるのか？）

・日本人は不満に強く、不安に弱い  
（不満ばかりを言うのは簡単だが、単に不安のはけ口にしてないか？）

・着手も撤退もすばやく／始めるのも止めるのも遅い、日本人  
（もっと早く的確に判断し行動しろ！）

・研究所がもてる不経済とならないために  
（研究所の不経済を作る原因になっていないか？）

・金儲けは一人でも出来るが、事業は一人では出来ない。  
（必要なコミュニケーションは十分に取れているか？）

・貴重な経験の九割は、二度としたくない経験である。  
（自分の好きな仕事にばかり走ってないか？）

ここに挙げたのはほんの一部であり、本書の全般にわたって、これらのフレーズがちりばめられており、毎日一つづつを復唱していただけても、日常的な心構えを変えることができるのでは…？などと半分本気で考えてしまった。

予想通り紹介らしからぬ文章になってしまっているのですが、どういった人がどういった目的で読む本なのか？ということ以下にまとめてみた。

#### 【企業の研究開発部門担当者】

自身の仕事の進め方をもう一度考え直すのにお勧め。ただし、全編を読むのには若干の覚悟

が必要かもしれない。

**【企業の人（研究開発部門担当者以外）】**

研究開発担当者を叱咤する際のツールとしてお勧め。ただし、この本を読んでいる担当者に対しては効果が少ないかもしれない。

**【アカデミックな部門の研究者】**

企業における研究開発の実態を知り、付き合い方(駆け引きの仕方?)を考えるのにお勧め。

**【企業に就職を考えている学生】**

企業における研究開発の実態を知り、就職を考えている会社への就職活動の際に周りの学生と差をつけるような質問のポイントを考えるのにお勧め。

このように書いてきたところで、ふと思いついて Web 上で書籍のタイトルを検索してみたところ、多くのサイトでこの本が紹介されており、それだけでも一読の価値はあるかも知れないと思える本である、と改めて認識した。また、それらのいくつかの書評を見ると、うまく書いているな、と感心させられてしまった。なお、この文章を読むよりもそちらを読んだ方が実はいいのかもしれない、とは言いっこなしで…。

ここまでつらつらと勝手なことばかりを書いてきたが、読者の方には稚拙な文章をお詫びするとともに最後まで目を通していただいたことに感謝の意を表したい。

また最後に、こういった”貴重な経験”をするきっかけを下さった編集委員の T 氏に多大なる感謝をしつつ、筆を置かせていただく…。